

平成 1 7 年度

独立行政法人国立美術館
国立国際美術館

実績報告書

目 次

国立国際美術館の概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	6
1. 収集・保管	6
(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況	6
(2) 保管の状況	8
(3) 修理の状況	9
2. 公衆への観覧	10
(1) 展覧会の状況	10
「常設展」	12
「オノデラユキ写真展」(企画展)	14
「没後100年記念 フランスの至宝 エミール・ガレ展」(共催展)	16
「シュテファン・バルケンホール 木の彫刻とレリーフ」展(企画展)	18
「ゴッホ展 孤高の画家の原風景 ゴッホ美術館/クレラー=ミュラー美術館所蔵」(共催展)	20
「転換期の作法 - ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリーの現代美術」展(企画展)	22
「瑛九 フォト・デッサン展」(企画展)	24
「もの派 - 再考」(企画展)	25
「プーシキン美術館展 シチューキン・モロゾフ・コレクション」(共催展)	27
(2) 貸与・特別観覧の状況	29
3. 調査研究	30
4. 教育普及	31
(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況	33
(1) - 2 広報活動の状況	33
(1) - 3 デジタル化の状況	34
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	35
(2) - 2 講演会等の事業	36
(3) - 1 大学等との連携	37
(3) - 2 ボランティアの活用状況	38
(4) 渉外活動	39
5. その他の入館者サービス	41

国立国際美術館の概要

1. 目的

当館は、昭和52年(1977年)に文化庁の施設等機関として設置された四つの国立美術館の一つで、日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術作品、その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれらに関連する調査研究及び事業を行うことを目的としている。

展覧事業については、常設展示と企画展示(特別展、企画展、共催展、近作展)の二本立てで運営している。内容は、現代美術を中心に、日本美術の成立と発展が世界の美術のそれと密接な関係を有することを美術作品の展覧を通じ、系統的・具体的に明らかにするものである。また、日本と世界の現代美術の新しい動向をわかりやすく展示している。

資料の収集については、日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術に関する作品・その他の資料のうち、現代美術(主に1945年以降)を重点的に収集している。

調査研究については、現代美術に関する基礎的調査研究、企画展示及び常設展示に関する調査研究のほか、世界の現代美術界の動向等の調査研究も行っている。

このほか、展覧事業の広報・普及、調査研究成果の公表、美術に関する講演会等の開催などの事業も行っている。

なお、当館は1970年に開催された大阪万国博覧会の際に建設された万国博美術館を利用して活動を行ってきたが、施設の老朽化、収蔵庫の狭隘及び交通アクセス等の諸問題から、大阪市内(中之島)への新築・移転を行い、2004年11月3日(文化の日)にグランドオープンを迎えた。

2. 土地・建物

建面積	4,156.54 m ²
延べ面積	13,486.93 m ²
展示面積	3,811.1 m ² (地下2階:1,962.2 m ² 、地下3階:1,848.9 m ²)
収蔵庫面積	1,827.9 m ² (地下2階:928.2 m ² 、地下3階:899.7 m ²)

3. 定員 16人

4. 予算 843,519,000円

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

実績

1. 業務の一元化
これまで行ってきた一元化事務に加え、情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
2. 省エネルギー等(リサイクル)
 - (1) 光熱水量
管理部門における室温の年間常温(夏季27、冬季25)の励行に加え、廊下・トイレ等に人感センサーの照明器具を導入し節電に努めた。
なお、ガスについては、オール電化のため使用量は無い。今後、より一層の省エネルギー化に努めたい。
ア. 電気 使用量 3,136,886kwh(平成16年度比 114.20%)
ア. 電気 料金 35,865,635円(平成16年度比 88.61%)
イ. 水道 使用量 10,615m³(平成16年度比 209.99%)
イ. 水道 料金 5,483,828円(平成16年度比 237.32%)
 - (2) 廃棄物処理量
館内LANを利用した通知文書の発信や両面コピーの推進により、ペーパーレス化に努めた。
ア. 一般廃棄物 7,200Kg(平成16年度比 80.85%) 料金 129,600円(平成16年度比 69.88%)
イ. 産業廃棄物 576Kg(平成16年度比 44.65%) 料金 152,555円(平成16年度比 15.50%)
 - (3) その他 古紙の再利用、OA機器のトナーカートリッジなどのリサイクルによる再生使用
3. 施設の有効利用
講堂の利用率 21%(78日/365日)
 - ・講演会 17日
 - ・ワークショップ 0日
 - ・ビデオ等上映 12日
 - ・外部機関の利用 49日
4. 外部委託

1 常駐警備業務	2 機械警備業務
3 清掃業務	4 看視業務
5 電気機械設備運転業務	6 昇降機設備保全業務
7 情報システム保守業務	8 空調設備保守業務
9 受変電設備保守業務	10 消防設備点検業務
11 庶務課業務	12 ミュージアムショップ運営業務

5. OA化

館内LANの整備状況

館内LANを利用した情報の共有及びメールを利用した通知・連絡により、ペーパーレス化を図るとともに、事務の効率化を図った。

・紙の使用量 297,000枚（平成16年度比 69.36%）

A4判 277,500枚

A3判 19,500枚

6. 一般競争入札

一般競争入札 0件、100万円以上契約件数 71件

平成17年度契約では、一般競争入札に付す案件はなかった。

ただし、土地借料、陳列品購入費、新館工事費を除く。

7. 評議員会，外部評価委員会

(1) 評議員会

開催回数 1回（平成18年3月2日（木））

議事内容 平成17年度事業報告、平成18年度年度計画（案）

平成18年度予算概要（案）、その他（評価結果の報告）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

省エネルギーについては、館職員全員に効率化の精神が行き渡り、廃棄物処理量について大幅に減少させることができた。

地下1階パブリックゾーンでのFM802のライブ放送、講堂の外部機関への貸し出し、地下2階展示場でのコンサートの開催など、館内施設の有効利用の促進に努めた。

【見直し又は改善を要する点】

当館は完全地下型であるためオール電化方式であること、また、入館者数が予想をはるかに超えたことから、電気及び水道使用量が前年度を上回った。

今後も業務運営の改善可能な事項の見直しに努め、外部委託についても検討し、効率化を引き続き推進していきたい。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

(国立国際美術館)

日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集する。

(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

方 針

1. コレクションの概要

国内外の現代美術について、体系的・通史的にバランスのある国立美術館として厚みのある収集を行う。

2. 現在の課題

アジアの現代美術の収集

メディアアート作品の収集

3. 平成17年度の収集方針

美術の国際的同時性や相互交流を重視しつつ、現代の絵画、水彩、素描、版画、彫刻、写真、メディアアート作品等を収集する。

実 績

1. 購入 146件

2. 寄贈 33件

3. 寄託 74件(平成18年3月31日現在の総数)

4. 陳列品購入費 予算額 304,222,500円 決算額 471,394,500円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中期計画の収集方針に基づき、収蔵品の欠落部分を補い、陳列を体系的に充実させるため、美術作品等選考委員会及び評価委員会の審議を踏まえ、146点の美術作品を購入するとともに、寄贈作品についても同様の手続きを経て、当館にふさわしい作品として認められた33点について、寄贈受入を行うなど着実に作品収集を行った。

主な作品として、洋画では、長年の念願であった現代ドイツを代表するジグマー・ポルケの初期の代表作《恋人たち》(1972)と国内ではほとんど収蔵例がないが、国際的には評価の高いベルギーの異色作家マルセル・ブロータースの《ああ!この鏡よ》(1975)、戦後日本のリアリズムを代表する阿部展也の《骨の歌》(1950)や夭逝の画家石井茂雄の《不安な都市シリーズ-共犯》(1956頃)さらに荒川修作の初期絵画3点をまとめて収蔵した。また、活躍中の日本の若手作家、小川信治の《ラス・メニーナス》(2002)や石川順恵の《解体する視線5》(2005)を収蔵した。

彫刻では、イギリスを代表するトニー・クラッグの《セクレションズ》(1999)や日本の彫刻を語る上で欠かせない鉄の彫刻家として知られる村岡三郎の《タナトスA(バッキンガムスタジアム)》(1975)、日本の80年代を象徴する遠藤利克の《寓話 ゼーレの枢》(1985)などを収蔵した。素描では、石井茂雄の数少ない素描作品《厳戒状態シリーズ-部屋A》や仮設的作品で著名な川俣正の記念碑的作品《P.S.1プロジェクト》(1984)などを収蔵した。

また、近年収集対象としての重要性がますます増している写真の分野では、国際的評価の高い杉本博司の建築シ

リーズと数学的形態のシリーズ合わせて11点を収蔵した。さらに、ドイツ現代写真の注目作家ヴォルフガング・ティルマンズの近作《フライシュヴィマー》(2003 - 2004)を3点収蔵したほか、日本の写真家(石内都、宮本隆司、オノデラユキ、米田知子)の代表作も多数収蔵した。

版画の分野では、マルセル・ブロータースの《署名、シリーズ》

メディアアートの分野では、映像メディアの可能性を追求するジュリアン・オピーの《Hirofumi with file》や森村泰昌の近作《フェルメール研究(動く絵画)》を収蔵した。

なお、寄贈については、洋画家の田淵安一の絵画2点のほか、スイス在住の版画家吉川静子の版画集、写真家宮本隆司の代表作《九龍城砦》(1987 - 1993)10点などの寄贈を受けた。

また、横尾忠則の全ポスター寄贈に向けての準備を進めた。

寄託作品の受け入れについては、パブロ・ピカソの代表的な版画と陶芸64点の寄託を継続した。

*添付資料

収集した美術作品件数の推移(事業実績統計表 p.1)

寄託された美術作品件数の推移(事業実績統計表 p.2)

購入・寄贈美術作品の一覧(事業実績統計表 p.44)

(2) 保管の状況

中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世へ伝えとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

実績

1. 温湿度

展示会場

空調実施時間 9:30~17:00(夜間開館日:19:00)

温度 夏季 25、冬季 21 湿度 夏季、冬季 50%

* 入館者が入ったときの温湿度管理について

中央監視装置の設定温湿度のデータ分析により、快適環境の維持に対応した。

* 24時間空調を行わない理由

地下施設であるため、閉館後に空調機器を停止させても温湿度の変化が小さいことと、現代美術という温湿度変化の影響を比較的受けにくい作品が中心であるため。

収蔵庫

空調実施時間 終日(24時間)

温度 夏季、冬季 22 湿度 夏季、冬季 55%

* 24時間空調を行わない理由

2. 照明 作品に最も適した照明環境を創出し、常に必要に応じた改善を行った。
3. 空気汚染 中央監視装置により二酸化炭素濃度を測定し、常に快適環境を維持した。
4. 防災 監視モニター及び警備員による定期巡回等、必要に応じた対策を行った。
5. 防犯 防犯システムの充実に加え、監視モニターと警備員による定期巡回のほか、退館後は機械警備とし防犯対策を行った。
6. その他 適正な温湿度の管理により、作品の保存環境の整備に努めている。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

展示場及び収蔵庫が地下にあるため、温湿度の制御がしやすくなったことに加え、ケミカルフィルターの組み込まれた空調機が、コンクリートから発生するアンモニアや空気中に含まれるアンモニアを除去し、収蔵庫内にクリーンエアーを循環させることができるため、快適な保存、収蔵環境を維持した。

また、恒常的に温湿度のデータ計測や環境測定を実施し、良好な保存環境の整備に努めた。

(3) 修理の状況

中期計画

(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。

伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

実 績

1. 洋画	2件		
水彩・素描	3件		
版画	36件		
写真	0件		
彫刻	1件		
工芸	0件		
2. 修理経費	予算額	5,185,000円	決算額 2,171,500円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

今年度についても、予算の範囲内で緊急に修理を必要とするものから計画的に修理を行った。

また、客員研究員を受入れ、紙支持体作品及び現代美術作品の調査研究を行うとともに長期的修復計画を策定した。

【見直し又は改善を要する点】

これまでの修理点数も少ないことから、データベース化には至っていないが必要性は認識しており、法人内での統一した取り扱いを含め、今後も継続的に検討していきたい。

*添付資料

修理した美術作品件数の推移（事業実績統計表 p.3）

修理した美術作品の一覧（事業実績統計表 p.58）

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会の状況

<p>中期計画</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>年5～6回程度</p> <p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。</p> <p>なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。</p> <p>また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。</p> <p>(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>

実績(総括表)

1. 常設展 展示替 4回
2. 特別展・企画展 8回 中期計画記載回数：年5～6回 「オノデラユキ写真展」 「没後100年記念 フランスの至宝 エミール・ガレ展」 「シュテファン・バルケンホール 木の彫刻とレリーフ」展 「ゴッホ展 孤高の画家の原風景 ゴッホ美術館/クレラー＝ミュラー美術館所蔵」 「転換期の作法 - ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリーの現代美術」展 「瑛九 フォト・デッサン展」 「もの派 - 再考」 「プーシキン美術館展 シチューキン・モロゾフ・コレクション」
3. 入館者数 1,788,175人(目標入場者数 485,000人)
4. 展覧会開催経費 予算額 44,100,000円 決算額 39,110,153円
5. その他 「ゴッホ展」をはじめとする共催展が中心だったこともあり、入館者数は目標入場者数を大幅に上回った。

自己点検評価

<p>【良かった点、特色ある取組み】</p> <p>「シュテファン・バルケンホール展」「転換期の作法展」「瑛九展」「もの派展」といった現代美術の展覧会における来館者数が予想以上であったことは、現代美術作品を主として扱う当館にあって、現代美術を広く普及</p>
--

させる観点から大きな成果であったと考える。

共催展においては、「エミール・ガレ展」、「ゴッホ展」、「プーシキン美術館展」を開催し、親しみやすい展示内容であったこともあり、入館者が予想よりはるかに上回り、また、親子連れが多く、小中学生の入館者数も昨年度と比べ多数となり、当館の存在が広くアピールできた。

常設展においても、同時開催の共催展及び特別展等と関連付けて展示し、また、4回の展示替えにより、当館の代表的なコレクションを展示するなど、多くの来館者に現代美術を理解してもらえよう努めた。

各展覧会ごとに行うポスター・チラシ及びホームページによる広報活動はもちろんのこと、新館そのものの認知度を高めるため、様々な方面で積極的な広報活動を行い入館者数の増加に努めた。

【見直し又は改善を要する点】

特に、「ゴッホ展」開催期間中、長時間の待ち時間が発生し、館外まで待機列ができた。今後、同規模の展覧会開催の際には、待機列や誘導方法について検討する必要があると考える。

当館の構造上の問題であるが、特に女性用トイレが非常に少なく、入館者に非常に迷惑をかけている。

*添付資料

入館者数の推移（事業実績統計表 p. 4）

入場料収入の推移（事業実績統計表 p. 7）

「常設展」

方 針

1. 常設展の概要

受託品を含む館藏品の中から定期的に展示替えを行い、第二次世界大戦後の日本及び欧米の現代美術について、可能な限り多くの作品を紹介することを目的とした。

2. 現在の課題

- ・企画展示とゆるやかに連動する常設展示の実施
- ・代表的なコレクションを紹介する常設展示の実施

3. 平成17年度の方針

企画展、特別展等の展示内容と関連づける所蔵品を中心とした常設展示の実施

4回の展示替えにより、代表的なコレクションを展示

実 績

1. 開会期間

平成17年 2月 5日～平成17年 4月17日(62日間/うち平成17年度15日間)

平成17年 4月29日～平成17年 7月18日(71日間)

平成17年 7月30日～平成17年10月10日(63日間)

平成17年10月22日～平成17年12月18日(50日間)

平成18年 1月 7日～平成18年 4月 2日(74日間/うち平成17年度72日間)

計320日間(平成16年度合計271日)

(常設展のみの開催期間5日間)

2. 会 場

地下2階展示場

3. 出品点数

43点

28点

69点

69点

59点

延 268点

4. 入館者数

686,553人(目標入場者数 181,000人)

うち常設展のみの入館者数 17,038人(目標入場者数 2,000人)

5. 入場料金 個人 : 一般420円 大学生130円 高校生70円

団体 : 一般210円 大学生 70円 高校生40円

6. 入場料収入

(常設展のみの入場料収入の合計 2,497,740円)

7. アンケート調査(企画展等のアンケートに含めて実施している。)

調査期間 平成17年 3月31日～平成17年 4月 3日(4日間)

平成17年 5月26日～平成17年 5月29日(4日間)

平成17年 6月 7日～平成17年 6月10日(4日間)

平成17年 8月18日～平成17年 8月21日(4日間)

平成17年11月10日～平成17年11月13日(4日間)

平成17年11月17日～平成17年11月20日(4日間)

平成18年 1月26日～平成18年 1月29日(4日間)

調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。

アンケート回収数	107件	366件		
	386件	271件		
	433件	806件		
	236件			
アンケート結果	・良い 58% (62件)	・普通 35% (37件)	・悪い 7% (8件)	
	・良い 62% (239件)	・普通 33% (128件)	・悪い 5% (19件)	
	・良い 66% (284件)	・普通 30% (130件)	・悪い 4% (19件)	
	・良い 57% (134件)	・普通 39% (92件)	・悪い 4% (10件)	
	・良い 60% (162件)	・普通 34% (93件)	・悪い 6% (16件)	
	・良い 50% (183件)	・普通 43% (156件)	・悪い 7% (27件)	
	・良い 60% (479件)	・普通 37% (300件)	・悪い 3% (27件)	

8. その他
常設展の充実を図るため、企画展及び特別展の内容についても十分な検討を行い、魅力的な展示になるよう努めた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

観覧者が当館の作品収蔵方針を明確に理解できるよう、収蔵作品を特定のテーマ別にして常設展を実施した。同時開催の企画展のテーマにちなんだ作品を関連づけて展示するなど、多くの来館者に現代美術を理解してもらえるよう努めた。

また、年間4回展示替えを行い、当館の代表的なコレクションの展示に努めた。

【見直し又は改善を要する点】

常設展示の充実を図り、展示作品の選定や作品の展示方法等に工夫を凝らし、現代美術に対する理解を高めるよう努めていきたい。

「オノデラユキ写真展」(企画展)

方 針

中国国宝展の開催中に、当館が主体的に関わる現代作家の個展を開くことは、幅広い観客層に同時代美術の魅力を知らせてもらう貴重な機会である。そのため、常設展示場の一部を企画展会場として、今年度はパリ在住で国際的に活躍する写真家オノデラユキの個展を開催することとした。

また、オノデラユキ写真展の開催に合わせ、写真コレクションを常設展示して、当館の現代写真に対する収集の成果を示すと同時に、オノデラユキの写真の特質が浮かび上がるように配慮した。

実 績

1. 開会期間 平成17年 2月 5日~平成17年 4月17日(62日間)
(うち平成17年度15日間)
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館
協 賛 (財)ダイキン工業現代美術振興財団、株式会社資生堂、キヤノン株式会社
4. 出品点数 52点
5. 入館者数 111,230人(目標入場者数56,000人(うち平成17年度は8,000人))
中国国宝展と同時開催だったこともあり、また写真も具象的かつ馴染みやすいテーマが多かったため、この種の企画展としては、異例の入場者を記録した。
6. 入場料金 個人 : 一般420円 大学生130円 高校生70円
団体 : 一般210円 大学生 70円 高校生40円
7. 入場料収入 常設展の開会期間 同時開催のため入場料収入は、常設展に計上。
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
パリを拠点に国際的に活躍する写真家オノデラユキの個展。代表作《古着のポートレート》をはじめ、オノデラがこの10年取り組んだ連作を中心に、新作を加えた52点によって、オノデラの遊び心あふれる写真世界を紹介した。印刷物では分からないプリントの質感や作品の大きさを実感できる展示となった。
10. 講演会等
2回 参加人数 210人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告(地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出)、美術館等へのポスター・チラシの配布
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
関西ウォーカー(2月2日-15日), KANSAI TIME OUT 2月号(Christopher Stephens), ギャラリー2月号 Garden展覧会情報(2月, 小市裕子), THE JAPAN TIMES(2月9日, Matthew Larking), 新日曜美術館アートシーン(NHK総合)2月13日, ぴあ(中部版)2月17日号, 朝日新聞(東京版)夕刊(2月18日, 西田健作) 読売新聞夕刊(2月23日, 木村未来), 芸術新潮3月号, ヴォーグニッポン3月号(青野尚子), art press 3月号(Evence Verdier)
13. アンケート調査
調査期間 平成17年 3月31日~平成17年 4月 3日(4日間)
調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。
アンケート回収数 107件
アンケート結果 ・良い 66%(70件) ・普通 23%(25件) ・悪い 11%(12件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

今回のオノデラユキ写真展は、万博公園時代に開催していた、中堅作家の個展シリーズ「近作展」の延長上にあり、比較的若手の作家の個展を開催する最初の企画となった。関西ではほとんど紹介されてこなかっただけに、現代写真に興味のある若い世代を中心に来場者が相次いだ。開会初日のオノデラ自身による「作者と語る」には180名もの観客が聴講に訪れ、オノデラの写真世界に関心を持つ観客の期待に応えることができた。

現代写真の動向は、絵画や彫刻と並ぶまでになっており、今後も力量のある写真家の個展やグループ展の開催の可能性を探ることが大切である。

「没後100年記念 フランスの至宝 エミール・ガレ展」(共催展)

方 針

大阪市中心部の中之島に移転した当館に求められる市民からのニーズとして、幅広い時代や地域、ジャンルの美術を紹介することが挙げられる。そうしたニーズに応えるために、絵画や彫刻とは異なる、工芸というジャンルに焦点を当て、近代ガラス工芸の巨匠エミール・ガレの大回顧展を企画した。現代美術向きの展示空間をガラス・ケースによる構成へと変容させる試みなど、美術館の新しい方向性を広く周知させることを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成17年 4月12日～平成17年 5月22日(37日間)
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館、日本経済新聞社
後 援 フランス大使館
協 賛 (財)ダイキン工業現代美術振興財団
協 力 日本航空、(財)北澤美術館、ベル・デ・ベル
企画協力 アートプランニングレイ
4. 出品点数 203点
5. 入館者数 47,628人(目標入場者数 20,000人)
オルセー美術館、エルミタージュ美術館、デュッセルドルフ美術館など海外の美術館からの日本初公開となる選りすぐりの名品やいままで公開されなかったポーラ美術館のコレクションが出品されることから高い関心が持たれ、目標入館者数を大きく上回ることとなった。
6. 入場料金 個人 : 一般1,200円 高校・大学生900円 小・中学生500円
団体 : 一般1,000円 高校・大学生700円 小・中学生300円
前売 : 一般1,000円 高校・大学生700円 小・中学生300円
7. 入場料収入 12,139,410円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
19世紀末ヨーロッパの工芸界に新風を吹き込んだアール・ヌーヴォー芸術を代表する工芸家エミール・ガレの没後100年を記念し、ガラス、陶器、家具という幅広い分野に想像力を発揮し、独創的な世界を切り開いたガレの全貌を解き明かそうとする展覧会。
10. 講演会等
2回 参加人数 276人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告(JR、私鉄及び地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出)、美術館等へのポスター・チラシの配布
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
日本経済新聞(3月11日)、HAPPY LIFE通信4月号、K-PRESS4月号、C.WORK E&E4月15日号、Lcam4月15日号、日本経済新聞(4月18日)、読売ファミリー4月20日号、アサヒファミリー4月22日号、日本経済新聞(4月27日)、日本経済新聞(4月28日)、KAWARABAN5月1日号、TOKK5月1日号、日本経済新聞(5月2日)、日本経済新聞(5月7日)、日本経済新聞(5月10日)、日本経済新聞(5月12日)、日本経済新聞(5月14日)、TOKK5月15日号、日本経済新聞(5月16日)、日本経済新聞(5月18日) 他、多数
13. アンケート調査
調査期間 平成17年4月23日～平成17年4月26日(4日間)
調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。
アンケート回収数 203件
アンケート結果 ・良い 89%(181件)・普通 6%(13件)・悪い 5%(9件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

作品をすべて展示ケースの中に納めたことにより、照明効果を最大限に活用できた。また、従来ガラス工芸作家というイメージが強かったガレに対して、今回の展覧会では家具や陶器作品を多数展示したことによって、新しい認識と評価を与えることができた。海外からの出品作品も多く、会期中に行った2回の講演会も盛況で、美術館にとって新しい客層の開拓に繋がる展覧会となった。

【見直し又は改善を要する点】

エミール・ガレの展覧会は日本でも毎年開催されることから、これまでの他のガレ展とは異なる点を事前にもっとアピールする必要がある。

「シュテファン・バルケンホール - 木の彫刻とレリーフ - 」(企画展)

方 針

多数の来館者が予想されるゴッホ展開催期間中に、現に海外で活躍中のアーティストの中から、日本でまだ紹介されていない彫刻家を取り上げた。大人から子供まで、幅広い年齢層に広く親しみやすい作風のアーティストを選び、ドイツ現代彫刻を展示したことは、現代美術を紹介する美術館として非常に意義深いと考え企画した。

実 績

1. 開会期間 平成17年 4月29日～平成17年 7月18日(71日間)
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館、大阪ドイツ文化センター
協 賛 DHL、(財)ダイキン工業現代美術振興財団
協 力 ルフトハンザドイツ航空
企画協力 シュプレングル・ミュージアム・ハノーファー
4. 出品点数 49件
5. 入館者数 403,780人(目標入場者数 113,000人)
ゴッホ展と同時開催だったこともあり、また新しい具象彫刻として高い関心が持たれ、目標入館者数を大きく上回る事となった。
6. 入場料金 個人 : 一般420円 大学生130円 高校生 70円
団体 : 一般210円 大学生 70円 高校生 40円
7. 入場料収入 常設展の開会期間 と同時開催のため入場料収入は、常設展に計上。
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
現代ドイツを代表する彫刻家シュテファン・バルケンホールの日本で初めての展覧会。初期の典型的な作品から、最近の新たな展開を示すレリーフを通して、これまでの活動のエッセンスを紹介する展覧会とした。
10. 講演会等
1回 参加人数 70人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告(JR、私鉄及び地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出)、美術館等へのポスター・チラシの配布
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
京都新聞(5月7日、太田垣実)、読売新聞夕刊(5月19日、木村未来)、福井新聞(6月6日)、熊本日日新聞(6月7日)、産経新聞夕刊(6月15日、早瀬広美)、毎日新聞(7月16日北陸版、青山郁子)美術手帖8月号(清水穰)、芸術新潮6月号、芸術新潮7月号、美術の窓5月号、美術画報 No.46、美術画報 No.47、インピテーション8月号(松井みどり)、メンズジョーカー7月号(木谷節子)、ランティエ8月号、装苑8月号、関西ウォーカー4月23日号、Kansai Time Out 5月号(Christopher Stephens)、TOKK 6月15日号、ポテトチップス8月15日号 他、多数
13. アンケート調査
調査期間 平成17年5月26日～平成17年5月29日(4日間)
調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。
アンケート回収数 390件
アンケート結果 ・良い 73%(283件)・普通 21%(83件)・悪い 6%(24件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

同時開催のゴッホ展の来館者が多く、予想をはるかに上回る来館者が訪れたが、あまり見る機会がない木の現代彫刻が大変好評であり、同時代美術の魅力を広く感じ取ってもらう絶好の機会となった。

また、ミュージアム・ショップと協力してポストカードを作製したが、販売成績が予想を上回るほど、好意的に受け入れられたと考える。

【見直し又は改善を要する点】

作品に触れようとする来館者が多く、厳重な柵を作品の周囲に張り巡らさざるを得なかった。今後は、キャプション等を工夫し、より一層周知する必要があった。

「ゴッホ展 孤高の画家の原風景 ゴッホ美術館 / クレラー = ミュラー美術館所蔵」(共催展)

方 針

大阪・中之島へ移転した当館の認知度を高め、リピーターを確保することは重要課題のひとつである。そのため、海外ではもちろんのこと、日本でも絶大な人気を誇る画家ゴッホの展覧会を、今日困難になりつつある学術的に意義の高い海外の近代美術の大規模な展覧会として企画した。テレビという社会的に最も影響力のあるメディアを有するNHKと共同開催し、広く世間に国立国際美術館の存在を認知せしめることを目指した。

実 績

1. 開会期間	平成17年 5月31日～平成17年 7月18日(43日間)
2. 会 場	国立国際美術館
3. 主 催	国立国際美術館、NHK大阪放送局、NHKきんきメディアプラン
後 援	外務省、文化庁、オランダ大使館、大阪府、大阪府教育委員会、大阪市、大阪市教育委員会
協 賛	昭和シェル石油、スズキ、損保ジャパン、大日本印刷、トヨタ自動車、三菱重工業
協 力	日本航空、日本通運、(財)ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数	109件
5. 入館者数	360,613人(目標入場者数100,000人) ゴッホの作品30点の他に、ゴッホが影響を受けたり交流のあった画家の絵画も展示したことから高い関心が持たれ、目標入館者数を大きく上回ることとなった。
6. 入場料金	個人 : 一般1,500円 大学生1,000円 高校生 600円 団体 : 一般1,200円 大学生 800円 高校生 400円 前売 : 一般1,400円 大学生 900円 高校生 500円
7. 入場料収入	107,330,360円
8. 担当した研究員数	1人
9. 展覧会の内容	短い活動期間に次々と変貌をとげたゴッホの絵画の流れを、ゴッホの故郷オランダが誇るゴッホ美術館、クレラー = ミュラー美術館のコレクションを通してたどり、また、ゴッホが影響を受けたり交流のあった画家の絵画や版画も展示し、ゴッホの創作活動の背景に迫る展覧会とした。
10. 講演会等	2回 参加人数 305人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報	プレスリリースの発行、交通広告(JR、私鉄及び地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出)、美術館等へのポスター・チラシの配布、NHKテレビでの告知番組
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等	新美術新聞5月1・11日合併号、K-PRESS5月1日号、C Work(5月15日)、Nasse6月号、ステーション6月号、京都新聞(6月11日、岩本敏郎)、朝日新聞夕刊(7月1日、森本俊司)、K-PRESS7月1日号、D & J(7月1日)、刀剣春秋(7月1日)、高知新聞7月4日、毎日新聞夕刊(7月4日、田原由起夫) 他、多数
13. アンケート調査	調査期間 平成17年6月7日～平成17年6月10日(4日間) 調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。 アンケート回収数 483件 アンケート結果 ・良い 80%(386件) ・普通 16%(78件) ・悪い 4%(19件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

世界中で最も入館者を集めてきた実績のあるゴッホの展覧会が、開館後間もない季節の良い時期に開催することができ、また、想定外の驚異的といえる数の人々が訪れたことは、当館の存在を広く知らしめることができた。

【見直し又は改善を要する点】

特に週末に展示場内が大変混雑し、じっくり作品を鑑賞しがたい環境となった。今後、本展に匹敵する規模の展覧会を開催する場合、入館者管理の方法の検討する必要がある。

「転換期の作法

- ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリーの現代美術」展（特別展）

方 針

これまであまり取り上げられることのなかった中東欧地域（ハンガリー、チェコ、スロヴァキア、ポーランド）の現代美術を紹介することを目的として企画した。1989年のいわゆる「東欧革命」以後の社会情勢の激変を作家たちがどのように受け止め、表現しているかを探った。主として90年代以降の表現に的を絞り、日本で初めての試みである。この展覧会をきっかけとして、極東アジアと中東欧とが相互に影響を与え合い、共鳴する未来、共に生きる世界に向けての模索を行うことを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成17年 8月 2日～平成17年10月10日（61日間）
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館、国際交流基金
協 賛 (財)ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数 70件
5. 入館者数 12,618人（目標入場者数 5,000人）
中東欧地域（ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー）の現代美術に高い関心が持たれ、目標入館者数を上回る事となった。
6. 入場料金 個人 : 一般830円 大学生450円 高校生250円
団体 : 一般560円 大学生250円 高校生130円
7. 入場料収入 5,829,720円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
中東欧地域（ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー）の1990年代以降に焦点を絞った展覧会で、日本で初めての試みとなった。
10. 講演会等
2回 参加人数 120人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告（JR、私鉄及び地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出）、美術館等へのポスター・チラシの配布
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
KANSAI TIME OUT 8月号, フロントアエイジ 8月3日号, 産経新聞夕刊(8月10日, 丸橋茂幸), Sankei ECONET NEWS (8月11日), 読売新聞夕刊(8月12日, 木村未来), 日経新聞(8月24日), OSAKA GUIDE August-September, 2005 8・9月号, Focustyle 9月号, TOKK 9月1日号, Salida 9月12日号, 赤旗(9月16日), 新美術新聞(9月21日), 朝日新聞夕刊(9月30日, 加藤義夫), 季報芸術学 9・10月号, SAVY 10月号, 神戸新聞(10月1日, 田中真治), ぴあ 10月6日号, アート・トップ 10月・11月号, web展評(11月14日, 石橋宗明)
13. アンケート調査
調査期間 平成17年8月18日～平成17年8月21日（4日間）
調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。
アンケート回収数 238件
アンケート結果 ・良い 57%（136件）・普通 34%（80件）・悪い 9%（22件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

現代美術を取り扱う当館にとって、主として1990年代以降に焦点を絞った中東欧地域の現代美術を紹介する本展が日本初の試みであった点が、大変有意義であった。

また、学生の入館者が非常に多く、新たな観客層を開拓することができた。

「瑛九 フォト・デッサン展」(企画展)

方 針

瑛九は、その独自の作風と実験的技法によって、わが国の戦後美術史に大きな足跡を残した美術家であるが、今回は特にフォト・デッサンと呼ばれた写真作品を集めた展覧会を企画した。今日、写真はメディア・アートとともに、美術表現の主要な媒体として注目されているが、瑛九のフォト・デッサンはその先駆的な意義を持つ。また戦後、大阪でデモクラート美術家協会を結成するなど、関西とも深いつながりがあり、戦後美術の再検証という観点では、同時に開催された「もの派 - 再考」展とも関連性をもたせた企画した。

実 績

1. 開会期間	平成17年10月22日～平成17年12月18日(50日間)
2. 会 場	国立国際美術館
3. 主 催	国立国際美術館
協 賛	(財)ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数	70件
5. 入館者数	15,952人(目標入場者数 6,000人) もの派 - 再考展と同時開催であったこともあり、またフォト・デッサンと呼ばれる写真技法に対し高い関心が持たれ、目標入館者数を大きく上回ることとなった。
6. 入場料金	個人 : 一般420円 大学生130円 高校生 70円 団体 : 一般210円 大学生 70円 高校生 40円
7. 入場料収入	常設展の開会期間 と同時開催のため入場料収入は、常設展に計上。
8. 担当した研究員数	1人
9. 展覧会の内容	瑛九が残した数百点にのぼるフォト・デッサンの中から、戦前から戦後にかけての代表作を集めた。また制作に用いられた道具、型紙等の資料、関連する油彩画なども展示し、瑛九の創作の軌跡を多角的に検証する展覧会とした。
10. 講演会等	1回 参加人数 63人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報	プレスリリースの発行、交通広告(JR、私鉄及び地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出)、美術館等へのポスター・チラシの配布
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等	ぴあ関西版(10月6日)、公明新聞(10月18日)、シティリビング(10月28日)、千里タイムズ(10月21日)、月刊ギャラリー10月号、TOKK トック(11月1日)、JSELEC 11月号、神戸新聞(12月10日、田中真治)、読売新聞夕刊(12月13日)、日経インテリッセ12月号、美術の窓12月号
13. アンケート調査	調査期間 平成17年11月17日～平成17年11月20日(4日間) 調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。 アンケート回収数 359件 アンケート結果 ・良い 54%(194件) ・普通 36%(129件) ・悪い 10%(36件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

大阪・中之島への移転後初めて取り上げた、日本人の没後作家の個展で、過去の日本の美術を検証する当館の姿勢を示すことができた。また、同時開催の「もの派 - 再考」展や常設展示「日本の戦後美術」とあわせて、多面的な日本の戦後美術史の紹介の一環とすることができたことは大変意義深い。

「もの派 - 再考」展（特別展）

方 針

現代美術の収集・展示を基本方針とする当館の新館移転一周年として、戦後日本美術史において最も重要な運動である「もの派」を改めて捉え直す展覧会を開催することは、現代美術を紹介する日本の国立美術館として非常に意義深いものであると考え企画した。「もの派」の起源として公認されている関根伸夫《位相 - 大地》の前史を提示することによって、「もの派」と呼ばれた動向がどのような状況で誕生したか、という論点を新たに示すことを目指した。また、「もの派」の作家たちと同時期に活躍した周辺の作家を同時に展示することによって、一つの時代様式として「もの派」を再考する機会を設けることを試みた。

実 績

1. 開会期間 平成17年10月25日～平成17年12月18日（48日間）
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館
協 賛 (財)ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数 72 件
5. 入館者数 11,609人（目標入場者数 5,000人）
「もの派」を問い直す展覧会として、さまざまな作家の作品を展示したことから高い関心が持たれ、目標入館者数を上回る事となった。
6. 入場料金 個人 : 一般830円 大学生450円 高校生250円
団体 : 一般560円 大学生250円 高校生130円
前売 : 一般700円 大学生350円 高校生200円
7. 入場料収入 4,263,240円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
定説となりつつある「もの派」発生のメカニズムに対して、「新しい世界」を求めて既成の表現から逸脱した方法を取っていった多くの作家たちの作品や行為を検証することによって、時代様式としての「もの派」を問い直しを促す展覧会とした。
10. 講演会等
2回 参加人数 147人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告（JR、私鉄及び地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出）、美術館等へのポスター・チラシの配布
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
KANSAI TIME OUT 11月号（中井康之）、文化庁月報 11月号（中井康之）、信濃毎日新聞（11月8日）、産経新聞夕刊（11月9日、丸橋茂幸）、中日新聞（11月9日、高橋綾子）、朝日新聞夕刊（11月11日、加藤義夫）、京都新聞（11月12日、岩本敏朗）統一日報（11月16日）、新美術新聞（11月21日）、朝日新聞夕刊東京版（12月1日、田中三蔵）、毎日新聞（12月2日、岸桂子）、新日曜美術館（NHK 教育）（12月3日放映「李禹煥」特集）、朝日新聞夕刊（12月7日）、読売新聞夕刊（12月9日、木村未来）、神戸新聞（12月9日、田中真治）、読売新聞（12月14日、木村未来）、京都新聞（12月16日）、京都新聞（12月17日、太田垣實）、毎日新聞夕刊（12月20日、三田晴夫）
13. アンケート調査
調査期間 平成17年11月10日～平成17年11月13日（4日間）
調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。
アンケート回収数 277件
アンケート結果 ・良い 69%（192件）・普通 24%（65件）・悪い 7%（20件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

日本の現代美術の源流ともいえる「もの派」の発生時期の作品群、およびその前史ともいえる視覚的錯覚を誘発するような作品群を一堂に展示することによって、「もの派」という運動体が内発的な面があることが、専門家ばかりでなく多くの美術ファンに示すことができた。また、一回性の強い作品を再制作する状況を動画で記録することができたのは、今後、「もの派」が歴史化されていく過程で重要な資料となると確信した。

また、本展覧会に合わせて、開館一周年記念として、シンポジウム「野生の近代 再考 - 戦後日本美術史」を3日間連続で開催し、連日、聴講席が満席になる程に好評を博した。

【見直し又は改善を要する点】

予想より多くの観覧者を迎えることによって、展覧会図録が会期終了の2週間前に売り切れた。新館に移転後、来館者がかなり増加し、そのニーズも高いことから、図録の作成にあたっては、発行部数について慎重に検討しなければならない。

「プーシキン美術館展 シチューキン・モロゾフ・コレクション」(共催展)

方 針

ロシア・モスクワにあるプーシキン美術館が所蔵する、フランス近代絵画の世界的コレクション「シチューキン・モロゾフ・コレクション」の代表的作品を一堂に紹介した展覧会。同コレクションは、19世紀末から第一次世界大戦までの短い期間に、2人のロシア人実業家がパリを中心に収集したコレクションとして知られている。

今回の展覧会では、印象派から20世紀初頭のマティス、ピカソら巨匠の逸品50点を厳選し、さらに同美術館が所蔵するフランス近代版画コレクション25点を併せて展覧することにより、フランス近代美術史の流れを系統的に紹介する展覧会とした。

また、日本での印象派を中心とした世界的コレクション展としては、1994年の「バーンズ・コレクション」、1997年の「コートールド・コレクション」以来となる。

実 績

1. 開会期間	平成18年 1月11日～平成18年 4月 2日(71日間) (うち平成17年度69日間)
2. 会 場	国立国際美術館
3. 主 催	国立国際美術館、朝日新聞社、朝日放送、プーシキン美術館、ロシア連邦文化情報省
後 援	外務省、ロシア連邦大使館
協 賛	トヨタ自動車、ダイキン工業、DNP大日本印刷、日本製紙、三井物産
協 力	日本航空、アエロフロート・ロシア航空、オリックス・リアルエステート(株) (財)ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数	75点
5. 入館者数	242,912人(目標入場者数 51,000人(うち平成17年度は 50,000人)) プーシキン美術館で秘蔵されてきたフランス近代絵画、中でも約40年ぶりとなるマティスの傑作『金魚』を 展示したことから高い関心が持たれ、目標入館者数を大きく上回ることとなった。
6. 入場料金	個人 : 一般1,400円 高校・大学生1,000円 小・中学生 500円 団体 : 一般1,200円 高校・大学生 800円 小・中学生 300円 前売 : 一般1,200円 高校・大学生 800円 小・中学生 300円
7. 入場料収入	54,075,400円
8. 担当した研究員数	1人
9. 展覧会の内容	プーシキン美術館が所蔵する、フランス近代絵画のコレクションとして名高いシチューキン・モロゾフ・コレ クションの中から、ルノワール、モネ、セザンヌ、ゴーギャン、ゴッホ、マティス、ピカソなどの絵画50点と、 同じく同美術館所蔵のフランス近代版画25点の合計75点を、7つのセクションに分けて展示した。
10. 講演会等	2回 参加人数 300人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報	プレスリリースの発行、交通広告(JR、私鉄及び地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター 掲出)、美術館等へのポスター・チラシの配布、朝日新聞社外壁に展覧会案内広報用の横断幕を 掲出、朝日放送テレビでの告知番組
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等	朝日新聞朝刊(11月18日),C・WORK11月30日号,美術館散歩倶楽部12月1日号,マナビィ12 月1日号,バーズアイ12月1日号,京都中央信用金庫社内報(12月1日),文部科学時報(12月10日),サ ンケイリビング12月10日号,朝日新聞朝刊(12月10日),文化庁月報12月15日号,美術手帖12月17 日号,マイ奈良12月17日号,ほっとタイムASAHI12月18日号,Nasse Osaka12月19日号,an関西版 12月19日号,ザ・おおさか 北区でっせ12月20日号,近鉄ニュース(12月20日),月刊美術12月20 日号,朝日新聞(12月20日),近くていい旅 電車&ウォーク12月22日号,朝日新聞朝刊(12月24日) Lマガジン12月24日号,C・WORK E&E12月25日号,KPRESS12月26日号,月刊シュシュ関西

12月26日号,ともも12月26日号,Kansai Time Out 12月26日号,旅こよみ12月28日号,すずかけ1月1日号,電車&ウォーク1月1日,朝日友の会チラシ(1月1日),公明クラブ1月1日号,刀剣春秋1月1日号,ASAKEP1月1日号,KANSAI Scene1月1日号,美術画報1月1日号,みなさまの足 阪神電車(1月1日),アサヒメイト1月1日号,朝日新聞朝刊(1月1日),あいあいAI(1月3日),The Japan Times(1月5日),ぴあ 関西版1月5日号,ホームタウン1月5日号,Kansai Walker 1月5日号,神戸ウォーカー1月5日号,The Japan Times(1月5日),KANSAI 1週間1月6日号,朝日新聞朝刊(1月9日),朝日新聞朝刊(1月10日),朝日新聞夕刊(1月10日),フロンティアエイジ1月11日号,朝日新聞朝刊(1月11日),シティリビング1月13日号,高知新聞(1月16日),福井新聞(1月19日),マンスリー・クラシック1月20日号,REGION1月21日号,大阪民主新報(1月22日),朝日新聞夕刊(1月24日),キャンペーン生活!1月25日号,大人のウォーカー関西版1月25日号,日本経済新聞夕刊(1月25日),Pretty1月30日号,C-WORK1月31日号,ASAKEP2月1日号,朝日友の会チラシ(2月1日),アサヒメイト2月1日号,グランドビュー2月1日号,現代挿花2月1日号,Kintetsu News(2月1日),産経新聞夕刊(2月1日),現代画報2月1日号,フリーマガジンOPPI2月1日号,ぴあ関西版2月2日号,朝日新聞夕刊(2月2日),赤旗(2月3日),朝日新聞夕刊(2月3日),SAVY2月4日号,サリダ関西版2月6日号,奈良新聞(2月8日),朝日新聞朝刊(2月11日),ASA(2月13日),C・WORK E&E2月15日号,県民福井(2月15日),奈良新聞(2月17日),朝日新聞(2月22日),京都新聞朝刊(2月25日),アサヒメイト3月1日号,ASAKEP3月1日号,ギャラリーガイドブック(3月1日),近くていい旅 電車&ウォーク3月1日号,日経インテレッセ3月1日号,中日新聞(3月1日),読売新聞夕刊(3月6日),朝日新聞朝刊(3月12日),毎日新聞夕刊(3月13日),TOKK3月15日号,朝日新聞朝刊(3月24日),アサヒメイト4月1日号,大阪人4月1日号,大阪市交通局作成ポスター1月~2月,朝日新聞夕刊(連載「今日の名画」全27回),朝日新聞朝刊(連載「教えてナターシャ」全10回)

13. アンケート調査

調査期間 平成18年1月26日~平成18年1月29日(4日間)

調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。

アンケート回収数 978件

アンケート結果 ・良い 89%(874件) ・普通 10%(95件) ・悪い 1%(9件)

自己点検評価

各展示作品の配置にゆとりを持たせたこと、作品を壁の片面のみに展示すること等、鑑賞者の立場に立った、見やすくわかりやすい展示を行い、展示場内の混雑を緩和することができた。また、各セクション・作品ごとの解説パネルの設置、音声ガイドの実施、こどもセルフガイドの配付を行い、入館者から好評を得た。

【見直し又は改善を要する点】

展示場特設ショップコーナーやトイレで混雑が生じ、来館者に不便を強い点が反省しなければならない。館内表示、誘導方法等に今後の検討する必要がある。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

実績

1. 貸与・特別観覧の件数

貸 与 32件(50点)

特別観覧 13件(15点)

2. その他

優れた現代美術作品の相互活用を推進するため、他館からの要望に幅広く応えるよう努めた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

当館の名作選及び所蔵作品目録を作成し、全国の美術館に配布し、館所蔵品に関する情報提供を積極的に進めた。また、他館からの作品貸与依頼に対しては、優れた現代美術作品の相互活用を推進すると同時に、当館の所蔵品をできる限り広く観覧に供するため、その要望には積極的に応えるよう努めた。

【見直し又は改善を要する点】

貸与・特別観覧の料金について、見直しに向けた検討を指摘されているが、今後、法人全体の課題として、他の公私立美術館や博物館の実情を精査しながら検討を進めていきたい。

*添付資料

貸与件数等の推移(事業実績統計表 p.8)

特別観覧件数の推移(事業実績統計表 p.9)

3. 調査研究

中期計画

(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。

- <1> 収蔵品に関する調査研究
- <2> 美術作品に関する調査研究
- <3> 収集・保管・展示に関する調査研究
- <4> 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
- <5> 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等

(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実績

1. 調査研究

(1) 現代美術の調査研究

日本の現代美術に関する調査研究

海外の現代美術に関する調査研究

(2) 展覧会のための調査研究

エミール・ガレに関する調査研究

シュテファン・バルケンホールに関する調査研究

ゴッホに関する調査研究

中欧現代美術に関する調査研究

瑛九に関する調査研究

もの派に関する調査研究

プーシキン美術館に関する調査研究

(3) 美術館教育に関する研究

(4) その他（講演会、セミナー等での発表）

別紙「調査研究一覧」参照

2. 客員研究員等の招聘実績（年度計画記載人数： 1人）

客員研究員 1名を招聘し、以下の調査研究を行った。

ア．紙支持体作品の保存に関する調査研究

イ．現代美術作品の保存に関する調査研究

3. 新館開館1周年記念シンポジウムの実施

戦後日本美術史を系統的に検証するための3日間連続シンポジウムを開催した。

3. 調査研究費 予算額 28,758,000円 決算額 29,802,998円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

年度計画に基づき、現代美術及び展覧会等に関する調査研究を行った。現代美術の調査研究については、当館広報誌である「美術館ニュース」への発表をはじめ22件の発表が行われ、展覧会のための研究についても、展覧会図録及び美術館ニュースを中心に、論文、年譜、参考文献など13件の発表を行うなど、積極的に研究成果の発表に努めた。

また、戦後日本美術史を系統的に検証するための3日間連続のシンポジウムを開催し、各公立美術館の地域ごとの調査の成果を全国的視野によってまとめると共に、詳細な報告書の作成を進めた。

*添付資料 調査研究一覧（事業実績統計表 p.81）

4 . 教育普及

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

方 針

常設展示や企画展示などによる現代美術の紹介を補うため、多角的に美術に親しんでもらうための教育活動を行うとともに、インターンやボランティア制度の導入により、教育普及活動のあり方についても検討を行った。

実 績（総括表）

- (1) - 1 資料の収集及び公開
収集件数 545件
公開場所 情報コーナーにおいて、資料の一部公開を行っている。
- (1) - 2 広報活動の状況
刊行物による広報活動 7種 28冊
ホームページによる広報活動
展覧会情報を中心に、各種教育普及事業の開催計画を掲載し、館の活動について積極的な情報発信を行

うとともに、新館に関する情報提供にも努めた。

マスメディアの利用による広報活動

展覧会情報や館の活動状況について、マスメディアに対する積極的な情報提供を行うとともに、取材や撮影依頼にも可能な限り対応した。

(1) - 3 デジタル化の状況

平成16年度にデジタル化した美術作品の件数

- ・文字データ 288件
- ・画像データ 0件
- ・図書データ 1,486件

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

こどものためのワークショップ	4回	101人
こどもびじゅつあー	8回	171人

(2) - 2 講演会等の事業

講演会	13回	2,691人
ギャラリートーク	9回	555人
ビデオ等上映	12回	645人

(3) - 1 大学等との連携

大学生の学芸員資格取得のための博物館実習を行った。

インターンの活用状況

平成16年度は6名(大学院生及び修了者)を受け入れ、学芸業務全般にわたって従事させた。

(3) - 2 ボランティアの活用状況

平成17年度は53名(大学生)を受け入れ、美術館業務の補助業務に従事させた。

(4) 渉外活動

館の業務充実を図るため、展覧会への寄付金支援をはじめ、経済団体等からの支援方策について検討を行った。

(5) 教育普及経費 予算額 89,527,629円 決算額 98,593,894円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

子供たちを対象としたワークショップやビデオ上映などは、当館のユニークな活動として定着し、講演会、ギャラリートークなども、現代美術への理解をうながす好機として、多くの参加者があった。

また、平成15年度から導入したインターン、学生のボランティア制度は、美術館における新しい教育普及活動のあり方を探るうえにおいても、非常に有意義な事業活動であった。

なお、インターン1名が当館学芸課研究補佐員として採用された。

【見直し又は改善を要する点】

博物館実習については、平成18年度から廃止する。

*添付資料

教育普及件数の推移 (事業実績統計表 p.15)

(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

実績

1. 収集

件数 545件

2. 公開

情報コーナーにおいて、資料の一部公開を行った。

自己点検評価

中期計画に基づき基礎資料等の収集に努め、現代作家研究の基礎となるカタログ、レゾネを中心に収書を行った。

情報コーナーを利用して一般入館者への公開しているが、施設と人員の制約から十分なものとはいえず、今後、更なる充実に向けて検討を進めていきたい。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実績

1. 刊行物による広報

(1) 年報「平成16年度版」

発行 1回発行(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関及び関係者

(2) 概要

発行 1回発行(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関及び関係者

(3) 図録

「没後100年記念 フランスの至宝 エミール・ガレ展」図録 料金 2,200円

「シュテファン・バルケンホール 木の彫刻とレリーフ」展図録 料金 1,800円

「ゴッホ展 孤高の画家の原風景

ゴッホ美術館/クレラー=ミュラー美術館所蔵」図録 料金 2,300円

「転換期の作法 - ポーランド、チェコ、

スロヴァキア、ハンガリーの現代美術」展図録 料金 1,600円

「瑛九 フォト・デッサン展」図録 料金 1,000円

「もの派 - 再考」展図録 料金 2,000円

「プーシキン美術館展

(4) フロアガイド

発行 11回発行
 料金 無償
 配布先 会場内

(5) ジュニアセルフガイド

発行 1回発行(年度計画記載発行回数1回)
 料金 無償
 配布先 会場内及び近隣の教育関係機関

(6) 美術館ニュース

発行 6回(偶数月)発行(年度計画記載発行回数6回)
 料金 無償
 配布先 広報普及先の各機関及び関係者

(7) 展覧会案内

発行 1回発行
 料金 無償
 配布先 会場内及び広報普及先の各機関

2. インターネット(ホームページ)による広報

展覧会情報、講演会等教育普及イベント情報、友の会情報、コンサート等各種イベント情報を掲載し、また、最新情報については、トップページに分かりやすく掲載し、インターネットによる情報提供に努めた。

3. その他の広報

JR大阪駅桜橋口通路(1ヶ所)、阪急電車梅田駅通路(2ヶ所)、京阪電車淀屋橋駅プラットフォーム(1ヶ所)に大型広告掲示板を設置。

提携先各交通機関(阪急電車、京阪電車、阪神電車、大阪市交通局)発行の情報誌への展覧会情報の掲載。

JR及び大手私鉄へのポスターの駅張りを実施。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中期計画及び年度計画に基づき、美術作品及び当館の活動内容について国民の理解促進を図るため、各種発行物の刊行により、幅広い年齢層に対する普及広報活動に努めた。ホームページの内容充実を図り、また、鉄道駅に大型広告掲示板を設置するなど、より積極的な広報活動にも努めてきた。

今後、メディア等各媒体を利用した広報を展開し、当館の存在並びに現代美術の普及について努めたい。

なお、事業実績をまとめた年報については、年度当初の速やかな発刊に努めており、評価会議等の場において、当館の事業結果をいち早く周知させる資料として、活用できていることは有意義である。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

(1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。

(5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。

(5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。

また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実績

1. 所蔵作品のデジタル化
平成17年度にデジタル化した美術作品の件数
文字データ 288件、画像データ 0件
平成16年度未収蔵作品数 5,487件(寄託作品148件を含む。)
平成16年度末デジタル化作品数 文字データ 5,448件、画像データ 2,065件
今後のデジタル化の対応 毎年約100件をデジタル化予定
2. ホームページのアクセス件数(平成12年度アクセス件数 182,218件)
688,220件
3. デジタル化した情報の公開
HP等による公開件数 0件

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

ホームページ上で展覧会情報は勿論、各種プログラム情報やコンサート等のイベント開催情報を分かり易く掲載した。今後さらに、インターネットを活用した普及活動の推進に努めたい。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実績

1. 事業名 こどものためのワークショップ
開催期間
ア.平成17年 7月30日(1日間)(開催場所:地下1階講堂) 25人
イ.平成17年 7月31日(1日間)(開催場所:地下1階講堂) 25人
ウ.平成18年 1月28~29日(2日間)(開催場所:地下1階講堂) 28人
エ.平成18年 2月25日(1日間)(開催場所:地下1階講堂) 23人
参加者数(平成12年度実績 人)
101人(97人)
担当した研究員数 1人
事業内容 現役作家と子供たちが直接交流できるワークショップ
2. 事業名 こどもびじゅつあー
開催期間
ア.平成17年 5月28日(1日間)(開催場所:地下1階パブリックゾーン等) 22人
イ.平成17年 6月25日(1日間)(開催場所:地下1階パブリックゾーン等) 32人
ウ.平成17年 9月24日(1日間)(開催場所:地下1階パブリックゾーン等) 13人
エ.平成17年10月29日(1日間)(開催場所:地下1階パブリックゾーン等) 19人
オ.平成17年11月26日(1日間)(開催場所:地下1階パブリックゾーン等) 13人
カ.平成17年12月17日(1日間)(開催場所:地下1階パブリックゾーン等) 11人
キ.平成18年 1月14日(1日間)(開催場所:地下1階パブリックゾーン等) 30人
ク.平成18年 3月11日(1日間)(開催場所:地下1階パブリックゾーン等) 31人

参加者数 (平成12年度実績)	人)
171人	
担当した研究員数	1人
事業内容	国立国際美術館と現代美術作品に親んでもらうためのギャラリートーク
3. 事業名	ジュニア・セルフガイド
配布数	6,000部
担当した研究員数	1人
事業内容	子どもたちが自由に作品を見て回るための解説シート

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
ワークショップについては、作家自身との共同制作など、アーティストのユニークな発想が子ども達に大変好評であった。
子どもたちの自由になる時間のある土曜日に、現代美術に親しめるように、今年度から実施した対話型のギャラリートーク「こどもびじゅつあー」が、再度参加する子どももおり、大変好評であった。
【見直し又は改善を要する点】
「こどもびじゅつあー」を広く周知するための広報活動の見直しが必要である。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画
(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し充実を図る。

実績

1. 講演会	
15回 (シンポジウム3回を含む。) (年度計画記載回数: 11回)	
開催期間	15日間 (延べ13回)
開催場所	講堂及び展示場
参加者数	2,691人 (延べ人数) (平成16年度実績 18回: 1,445人)
担当した研究員数	16人 (延べ人数)
事業内容	展覧会に合わせた講演会及び現代美術に関する普及事業
アンケート結果 (回答数 件)	・良い % (件) ・普通 % (件) ・悪い % (件)
126件	・良い 91% (115件) ・普通 9% (11件) ・悪い 0% (0件)
150件	・良い 87% (130件) ・普通 13% (20件) ・悪い 0% (0件)
70件	・良い 93% (65件) ・普通 7% (5件) ・悪い 0% (0件)
165件	・良い 97% (160件) ・普通 3% (5件) ・悪い 0% (0件)
140件	・良い 96% (135件) ・普通 4% (5件) ・悪い 0% (0件)
60件	・良い 93% (56件) ・普通 7% (4件) ・悪い 0% (0件)
60件	・良い 97% (58件) ・普通 3% (2件) ・悪い 0% (0件)
450件	・良い 60% (270件) ・普通 33% (150件) ・悪い 7% (30件)
455件	・良い 81% (370件) ・普通 16% (72件) ・悪い 3% (13件)
505件	・良い 89% (450件) ・普通 10% (48件) ・悪い 1% (7件)
63件	・良い 86% (54件) ・普通 14% (9件) ・悪い 0% (0件)

42件 ・良い 83% (35件) ・普通 17% (7件) ・悪い 0% (0件)
 105件 ・良い 90% (95件) ・普通 8% (8件) ・悪い 2% (2件)
 150件 ・良い 97% (145件) ・普通 3% (5件) ・悪い 0% (0件)
 150件 ・良い 93% (140件) ・普通 7% (10件) ・悪い 0% (0件)

2. ギャラリー・トーク

9回 (年度計画記載回数: 5回)

開催期間 9日間 (延べ9回)

開催場所 講堂及び展示場

参加者数 555人 (延べ人数) (平成16年度実績 3回: 450人)

担当した研究員数 9人 (延べ人数)

事業内容 展示作品の解説

アンケート結果 (回答数 件) ・良い % (件) ・普通 % (件) ・悪い % (件)

70件 ・良い 94% (66件) ・普通 6% (4件) ・悪い 0% (0件)

30件 ・良い 87% (26件) ・普通 13% (4件) ・悪い 0% (0件)

40件 ・良い 88% (35件) ・普通 12% (5件) ・悪い 0% (0件)

23件 ・良い 65% (15件) ・普通 35% (8件) ・悪い 0% (0件)

21件 ・良い 67% (14件) ・普通 33% (7件) ・悪い 0% (0件)

25件 ・良い 80% (20件) ・普通 20% (5件) ・悪い 0% (0件)

88件 ・良い 57% (50件) ・普通 40% (35件) ・悪い 3% (3件)

124件 ・良い 90% (112件) ・普通 10% (12件) ・悪い 0% (0件)

134件 ・良い 93% (124件) ・普通 7% (10件) ・悪い 0% (0件)

3. ビデオ等上映

12回 (年度計画記載回数: 0回)

開催期間 12日間 (延べ12回)

開催場所 地下1階講堂

参加者数 645人 (延べ人数) (平成16年度実績 7回314人)

担当した研究員数 12人

事業内容 展示作品の解説及び現代美術の紹介

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

展覧会にあわせた教育普及事業として、講演会や対談、ギャラリー・トークなどを積極的に実施した。現代美術を扱う展覧会において、作家自身による講演会や対談などは、出品作家の生の声に触れることができる貴重な機会であった。また、展覧会ごとにギャラリー・トークを実施し、担当学芸員が展示場内で作品を見ながら分かりやすく解説を行うとともに、来館者が感じた疑問や感想などを直接フィードバックできる、恰好の機会ともなっている。今後も、現代美術に関する教育普及事業として、充実した内容を検討しながら継続していきたい。

(3) - 1 大学等との連携

中期計画

大学等と連携し、大学院生や大学生を受け入れ、美術作品に関する実習等について検討、実施する。

実績

1. 博物館実習生

受入期間 平成17年 7月25日～平成17年 8月 2日(土、日を除く7日間)

開催場所 国立国際美術館

参加者数(平成12年度実績 人)

33名(21名)

担当した研究員数 7人

事業内容

大学生の学芸員資格取得のための博物館実習

その他

近隣の美術館を利用したカリキュラムを導入し、できるだけ日常業務を体験できる形での実習に努めた。

2. インターンシップ制度の実施

受入期間 平成17年4月1日～平成18年3月31日

開催場所 国立国際美術館

参加者数

6人(0人) 平成15年度からの新規事業

担当した研究員数 7人

事業内容

美術作品や美術史、あるいは美術館の活動や学芸員の業務に関心を持ち、それらを研究し、将来美術に関わる仕事に就きたいと強く希望する者(大学院生または大学院修了者)に対し、より具体的、実践的な知識を習得してもらうことを目的とした実務研修。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

博物館実習については、幅広い実体験の場を提供することができた。このことは、実習生にとっては勿論のこと、当館と他館の連携協力の面でも大変有意義な実習となった。

なお、平成18年度からは廃止する。

インターンについては、学芸員との日常的な実務研修を通じ、各自の専門的知識の向上、経験の蓄積は勿論のこと、館にとっても、今後の新しい教育普及事業のあり方を探るうえにおいて、有意義な事業活動であった。

【見直し又は改善を要する点】

学芸員と各インターン間において、研修課題やその取り組み方に対する相談をより緊密に行うことにより、学芸業務の更なる円滑化を図るとともに、インターンのより高い参加意識と研修内容の充実を目指していきたい。

(3) - 2 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

実績

1. 登録人数 53人

2. 活動内容

展覧会ごとに実施する教育普及事業(講演会、ワークショップ等)の補助業務を中心に、各種広報物の発送及び図書資料を含む各種資料等の整理補助業務に従事した。

3. 今後の取り組み

教育普及事業を中心とした美術館としての今後の新しい事業展開に、ボランティア活動を積極的に活用する

ことで、事業の効率化と内容の充実を図っていきたい。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

スタッフ数の少ない当館において、各種教育普及事業を実施する際の補助者として、53名のボランティアに協力いただけたことは、来館者に対するきめ細かいサービスにもつながり非常に有益であった。

また、資料整理や広報物の発送作業等においても協力が得られ、迅速かつ有効な広報活動につながった。

【見直し又は改善を要する点】

ボランティアに対するより確実、効率的な連絡体制の確立と、効果的な勤務形態の検討を行っていきたい。また、各人の参加意識を高めながら、美術館業務に対する理解を深められるよう工夫していきたい。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

実績

1. 企業等との連携

「エミール・ガレ展」

共催：日本経済新聞社

協力：日本航空

「シュテファンバルケンホール展」

協賛：DHL

協力：ルフトハンザドイツ航空

「ゴッホ展」

共催：NHK、NHKきんきメディアプラン

協賛：昭和シェル石油、スズキ、損保ジャパン、大日本印刷

トヨタ自動車、三菱重工業

協力：日本航空、日本通運

「転換期の作法 ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリーの現代美術」展

共催：独立行政法人国際交流基金

「プーシキン美術館展」

共催：朝日新聞社、朝日放送

協賛：トヨタ自動車、ダイキン工業、大日本印刷、日本製紙、三井物産

協力：日本航空、エアフロート・ロシア航空

2. (財)大阪21世紀協会との連携

(財)大阪21世紀協会が発行する関西で唯一の英・日併記の情報誌「MEET OSAKA」に関西地区の美術館、博物館が展覧会情報を掲載し、経済界と連携した広報活動を行い、日本を訪れる外国人の入館者増を図った。

3. 「関西元気文化圏」への参加

文化庁が提唱した「関西元気文化圏」へ参加し、展覧会ポスター、チラシ等にロゴマークを印刷。

4. 「関西文化の日」への協力

関西広域連携協議会及び関西元気文化圏推進協議会が実施する「関西文化の日」事業に協力し、11月19日、20日の常設展観覧料金を無料とした。

5. 「国際博物館の日」事業への協力

(財)日本博物館協会が実施する「国際博物館の日」事業に協力し、5月18日の常設展観覧料金を無料とした。

6. 「ミュージアムぐるっとパス・関西2005」事業への協力

関西の美術館・博物館等約60館で実施する共通入館券事業「ミュージアムぐるっとパス・関西2005」に参加し、常設展観覧料金を無料とした。

7. 「YOKOSO! JAPAN Week」事業への協力

国土交通省が実施する「ビジット・ジャパン・キャンペーン」の中核事業である「YOKOSO! JAPAN W

Week 事業(1月20日～2月20日)に協力し、外国人に対し常設展観覧料を20%引き(420円→340円)とした。

8. ICカード「PiTaPa」との連携
阪急電鉄、京阪電気鉄道、阪神電気鉄道、大阪市交通局が、平成17年度から運用を開始したICカード「PiTaPa」利用者に対して、観覧料金を団体扱いとするとともに、各社が発行する広報誌へ展覧会情報を掲載した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中東欧の現代美術を紹介した「転換期の作法」展は、独立行政法人国際交流基金に働きかけ、共催とすることができたことは、非常に有効であった。

幅広い層の来館者を獲得するためには、あらゆる方面への広報が必要である。館独自の広報活動だけでは限界があるため、企業等との連携を取ることは非常に有効である。「YOKOSO! JAPAN Week」事業に協力し外国人来館者が増加した。また、関西大手私鉄等が導入したICカード「PiTaPa」は、今後関西一円に普及する予定で、今後の来館者獲得が大いに期待できるとともに、各社の広報誌に展覧会情報を掲載することにより、広く有効な広報が可能となった。

また、当館友の会に法人会員として、新たに4社が入会した。今後も企業へ積極的に働きかけ、拡充を図りたい。

【見直し又は改善を要する点】

展覧会に対する助成団体への申請を行ったが、平成17年度は採択に至らなかった。展覧会事業を充実したものとするためには、有効な方策であるため、積極的に取り組む必要がある。

6. その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に行い、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実績

1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等 (1)-1

障害者トイレ	1 箇所 (B 1 階)
障害者エレベータ	2 基
段差解消 (スロープ)	0 箇所
貸出用車椅子	6 台 (1 階)

2. 観覧環境の充実 (1)-2、(1)-4

展示作品リストを含めたリーフレットを無料配布するとともに、館内にビデオテークを設置し、情報提供を行った。

新たな客層を開拓するため、クラシックやジャズコンサートを 11 回 (有料、無料共) を開催し、これまで美術館に足を運ぶ機会がなかった方に来館いただけた。また、開催状況を新聞に掲載することができ、当館の存在をアピールすることができた。

3. 夜間開館等の実施状況 (1)-3

(1) 夜間開館実施状況

- ア. 開催日数 45 日間
- イ. 入館者数 91,103 人 (総入場者数 1,788,175 人、夜間開館入場率 5.1%)
- ウ. 実施日 共催展、特別展開催期間中の毎週金曜日及びゴッホ展最終の 3 日間

(2) 小中学生の入場料の低廉化

平成 17 年度についても、常設展及び企画展において、小・中学生の観覧料を無料とした。

(3) (2) 以外の入場料金の取り組み方

- ア. 学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金の低廉化を実施した。

(4) その他の入館者サービス

共催展・特別展開催中の毎週金曜日及び「ゴッホ展」最終の 4 日間に夜間開館を実施した。

「ゴッホ展」の後半、開館時間を 30 分早めた。

ベビーカー 2 台の貸し出しを行った。

高齢者に配慮して、拡大鏡 (ルーペ) を受付に配置し、希望者に貸し出しを行った。

4. アンケート調査 (1)-3

調査期間	平成 17 年	3 月 31 日 ~ 平成 17 年	4 月 3 日 (4 日間)
	平成 17 年	4 月 23 日 ~ 平成 17 年	4 月 26 日 (4 日間)
	平成 17 年	5 月 26 日 ~ 平成 17 年	5 月 29 日 (4 日間)
	平成 17 年	6 月 7 日 ~ 平成 17 年	6 月 10 日 (4 日間)
	平成 17 年	8 月 18 日 ~ 平成 17 年	8 月 21 日 (4 日間)

平成17年11月10日～平成17年11月13日(4日間)

平成17年11月17日～平成17年11月20日(4日間)

平成18年 1月26日～平成18年 1月29日(4日間)

調査方法 展示場出口にアンケート用紙を配置し、任意で記入・提出を依頼した。

アンケート回収数	111件	208件
	162件	243件
	339件	311件
	409件	825件

アンケート結果	・良い 49%(55件)	・普通 28%(31件)	・悪い 23%(25件)
	・良い 74%(120件)	・普通 22%(36件)	・悪い 4%(6件)
	・良い 66%(225件)	・普通 32%(107件)	・悪い 2%(7件)
	・良い 65%(268件)	・普通 30%(121件)	・悪い 5%(20件)
	・良い 67%(139件)	・普通 31%(64件)	・悪い 2%(5件)
	・良い 67%(164件)	・普通 28%(67件)	・悪い 5%(12件)
	・良い 73%(227件)	・普通 24%(76件)	・悪い 3%(8件)
	・良い 71%(585件)	・普通 27%(221件)	・悪い 2%(19件)

5. 一般入館者等の要望の反映 (2)

アンケート結果の分析を行い、可能なものから改善に努めるとともに、新館運営に向けて参考とした。

6. レストラン・ミュージアムショップの充実 (3)

現代美術をより親しく感じてもらえるよう、販売グッズの内容を検討し、充実に努めた。

また、展示換休館期間中に明るく、かつカラフルな照明に改装し、集客に結び付けることができた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

当館では、展示空間の在り方が展示作品に大きく反映する現代美術を扱うため、展示場内に解説パネル類を掲示することができない。これは、作品自体を十全な状態で鑑賞してもらいたいという配慮からであるが、一方では来館者から、解説パネルを望む声や作品キャプションを大きくして欲しいとの声も聞かれる。そのような声に応えるため、各展覧会ごとに展示作品リストを含めたリーフレットを無料配布するなど、鑑賞環境の充実に図った。

小・中学生及び高校生の観覧料の低廉化については、継続して実施した。

なお、トイレ等の案内表示を大きな文字ものを加えた。

入館者サービスについては、これまでのアンケートに加え、項目を設定せずに自由に意見を記入していただけるフリーアンケート用紙も設置し、それらの結果の分析を踏まえ、ゴールデンウィーク中の休館日の臨時開館、「国際博物館の日」及び「関西文化の日」に伴う入館料無料日の設定、共催展等開催期間中の金曜日の夜間開館を実施したが、充実に目指し検討を進めていきたい。

【見直し又は改善を要する点】

当館の構造上の問題であるが、共催展等来館者が多数の場合、特に女性トイレが少なく、トイレ待ち列ができた。